

日中の受動表現

——日本語学習の観点から——

孫 桂 琴

一 序 論

現代日本語において、文法に関する日中両国語の対照研究は、語構成・文の構成・表現形式などについては、研究がかなり進んでいると言ってもよい。本稿は、中国で日本語教育に携わってきた私が、言語理論をどのように教育現場に生かすという観点からのものである。日本語の学習の中で、日本語の受動表現は、大変多様で、特に迷惑の受け身表現は、中国語に直訳すると、なかなか意味が通じない場合が多い。例えば、

客に來られて、勉強がでなかつた。／被客人來、沒能學習。

(x)

その逆に、中国語で極普通の受動表現を、日本語に訳すと、受動表現が不可能の場合もある。例えば、

他被那件事愁死了。／彼はそのことに困られてしまった。(x)

本来日本語の受動表現は「木を切り倒す—木が切り倒される」、「刑事が犯人を掴まえる—犯人が刑事に掴まえられる」のように、

他動詞の目的語が受け身の主体となつて、成立するものであるが、日本語の場合には、自動詞についても、「雨に降られる」、「子に先立たれる」のような受け身の形が見られる。これは本意な意味で、迷惑のニュアンスを持つ言い方であり、「迷惑の受け身」と呼ばれる。迷惑の受け身は「泥水を跳ね返された」、「塙に車をぶつけられた」のように、他動詞についても成立するが、この場合には普通、他動詞の目的語は受け身の主体とならない。

中国語では、「被・讓・教・叫・給・由」などの「介詞」と「挨・受」などの動詞によつて、表される受動表現がある。中には、日本語と同じような使い方もある。これは日本語学習の際、便利であるが、と同時に、意味と用法の異なる場合、両者を混同して、間違えることもある。

日本語の受動表現は、外国人の学習者にとって、難しい問題の一つである。それを使いこなすには、母国語との類似点と相違点をよく知ることが大切である。それでは、次に日本語と中国語におけるそれぞれの受動表現を比較しながら、見ていこうと思う。

二 客観的な叙述に用いる受け身

古来、日本語の口語では、あまり受け身が使われなかった。時として、使われたとしても、不満、不本意の意味の含まれる迷惑の受け身であった。ところが、明治以後、西欧語の影響を受けて、非情物を主語にすえた受動形も現れるようになった。例えば、

(1) 日本は海に囲まれている。

(2) 私のこの気持ちには、次に挙げる有島武郎氏の文章によって、さらに一層はつきり裏書きされるだろうと思う。(上田英夫)

〔現代文章講座〕

以上の例文では、主語にすえた「日本」、「心持ち」は、能動文において、それぞれ「囲む」、「裏書きする」の客語である。

中国語にも、このたぐいの受動形がある。例えば、

(1) 蘆花被微風吹起。／葦の花は微風に吹かれて、舞い上がった。

(2) 夜空被五彩繽紛的焰火照得光彩奪目。／夜空は花火の輝きに

照らされて、(見る者の)目を奪うばかり美しい彩りになった。

以上挙げた二文では、主語は非情物を表す名詞で、「蘆花」、

「夜空」は、能動文において、それぞれ「吹」、「照」の客語であることで、前に挙げた日本語の受け身文と同じ形式だと言っておかろう。

このたぐいの受動形は(主語が有情的場合も含めて)、時とし

て、話し手の強調したい気持ちと相俟って、客語であるべき語を一番最初の位置にすえ、それを話題として、客観的に論じる場合に使われる。また、文脈から言うと、これは、主語の一致性の要求に應じることに役立つのである。例えば、

(1) 我要利用你們、而不被你們所利用。(老舍)／私はあなたたちを利用しよう。しかし、あなたたちに利用されない。

(2) 太郎は両榎類になった。一日中シュノーケルをつけて、海に潜っている。海の中の世界の美しさにとりつかれたのである。

(曾野綾子の「太郎物 語」)

(3) 内供は首を振って、痛くないという意味を示そうとした。ところが鼻を踏まれているので、思うように首が動かない。

(芥川竜之介「鼻」)

以上のような二つか、それ以上の文からなっている例は、主語が、ただ一度しか現れない。これは受け身表現があるから、後文に主語がなくても、前文と同じであることを意味している。以上の各例文は、能動文の「AはBを…する」から変わったもので、動作主は文頭に出てくる。ところが、動作主の現れない場合も少なくない。例えば、

(1) 四月七日には入学式が行われます。

(2) 会議が開かれる。

このような、中国語で「挙行入学典禮」、「開会」の能動態で表される文を、日本語では、受動形で表すほうが自然である。しか

し、中国人の学習者には学習しにくい用法である。中国語の受け身表現には、「会被開了」／「会議が開かれる」という言い方がない。「開会」／「会議をする」と言うとき、いかにもこちらが進んでそうするという感じである。そのため、自然にそのような状態になるという意味を表すには、「有会」／「会議がある」というのがよさそうである。なかなか受動形で表せない。時としては、過去のことを叙述するに、「会開了」／「会議が開いた」のような表現もあるが、これは形式上で、受動文でないようだが、意味の上では、受け身表現である。中国語ではこういうたぐいの受け身表現もよく見られる。例えば、「北京解放了」／「北京が解放した」、「茶杯打破了」／「コップが壊した」、「人民生活逐步改善」／「人民の生活がだんだん改善する」などがそれである。だから受け身とは、必ず中国語の「被」に相当するという考えに拘らないうで、その内的意味を理解することが大切である。

以上挙げた例文は、非情の受け身として、客観的な叙述の一つで、話し手と無関係に行われることを表す場合が多い。もう一つ客観的な叙述で、受け身で状態を表す場合もある。

(1) 机の上に本が置かれている。
(2) 花壇に花が植えられている。

このような文を中国語に訳せば、「桌子上放着書」、「花壇里栽着花」のような状態を表す能動文になる。これは中国語の受動形ではなかなか表せない。

客観的な叙述に用いる受け身で、自発とつながる受動形もある。日本人の多くは非常に婉曲的な叙述が好きで、ものを言う場合、客観的な色彩をそえて言ったりする。例えば、「……と言われている」、「……と思われる」、「……と考えられる」のような表現がそれである。これは普遍性、一般性を含む表現である。このような表現は主体の主観的な判断が含まれないので、自発と区別がつかない。だから、この点では、受け身と自発とがつながると見られる。これを中国語で表す場合、受け身だけで不十分であり、また、その動詞の前に、一般とかいうような連用修飾語を使わなければならぬ。そこから日本人の個人の方を人に押し付けることを避ける。遠回しにものを言う意識が伺われる。

以上客観的な叙述に用いられる受け身をあげたが、日中両国語共に、非情物を主語にすえる場合が多い。ところが日本語では、非情の受け身が多いけれども、必ずしも制限がないとは限らない。中国人の学習者はよく次のような文を作り出す。

(1) 昨日、買った本が林さんに持って行かれた。
(2) この本は李さんに読まれている。

これは文法的には、何の間違いもないようだが、言語習慣として、日本語であまりそういう言い方をしない。こういう文を作り出すのは、中国語で「那本書叫小林拿走了」のような口語文の発想にそのまま従ったためであろう。ところが日本語では、いわゆる「非情な受け身」は客観的に事実を叙述するため、動作主はあ

まり問題にならない。動作主が問題になるにしても、ある具体的な特定なものではなく、抽象化したものを動作の主体とするのが一般的である。「この本は李さんに読まれている」を「この本は青年の間で（人々に）愛読されている」とでも直さなければ成立できない。

要するに、以上述べたこの種の受け身表現は、日本語と中国語と、それぞれに多く使われている。「日本は海に囲まれている」、「弟は父に叱られた」のような直接受け身は、日中両国語では、同じような表し方であるため、中国人の学習者はあまり誤りをしない。ところが「会議が開かれる」、「…と思われる」のような、受け身表現の裏に、一種の自然、自発、婉曲の意味の含まれる文は、中国人の初学習には、理解しにくく、その使い方に不慣れで、間違いを起こすこともよくある。この点から考えると、日本語の受け身表現は中国語に比べて、複雑で、使用範囲も広いことは確かである。

三 客語を含んだ受け身

前節では、能動文の客語を主語をすえたために、客語がなくなる場合が多かったが、次にそれと類の違った、客語を含んだ受け身を検討しよう。

中国語の受け身表現には、客語を含んだ文が多い。「中国語文」の中の李臨定氏の書いた「被字句」によれば、受け身文は、次の

十種類に分けられている。

(1) 主語と客語が所属関係にある。

a 他被敵人炸傷了左脚。／彼は敵の爆弾によって、左足を傷つけられた。

b 在那次動亂中、有的人被奪去了生命。／あの動亂の中で、ある人は命を奪われた。

「他」と「左脚」、「人」と「生命」とはそれぞれ所属関係にある。これは日本語の「私は泥棒に財布を取られた」、「私は犬に手をかまれた」と同じ形式であって、被害を表す点では一致している。

(2) 客語が主語の一部分である。

a 平房被敵人燒毀了幾間。／平房は敵に幾間も焼かれた。

b 敵人的五個師已經被我們消滅了三個。／敵の五つの師団のうち、すでに三つは私たちに全滅された。

日本語の場合、「平房は敵に幾間も焼かれた」のように、客語だった「幾間」も「三個」も客語でなくなり、「状語」（日本語には「状語」という言い方がないので、ここで連用修飾語と言うべきだけれども、客語も連用修飾語だから、それと区別するには、中国語の習慣に従って、「状語」と言ってもいいように思う）になる。これは日本語の数詞が客語になれないからである。

(3) 客語は数量と時間である。

a 他被門檻絆了一交。／彼は入り口のしきいにつまずいた。

(×)彼は入り口のしきいに一度を倒された。)

b 在山里頭被包圍了三天三夜。／山の中に三日間包圍された。

「一交」は動的な数量で、「三天三夜」は時間の長さである。

これも日本語になると、客語でなくなり、「状語」になることで、

(2)と同じである。

(4)客語が動作の手段、道具である。

a 他用繩子捆上了箱子。(能動)

b 箱子被他捆上了繩子。(受動)

日本語では道具を表す語は「で」格で表される。従って、この受動文をそのまま日本語の受け身文に訳すと二通りが考えられる。

a 箱は彼に縄で縛られた。

b 箱を彼に縄で縛られた。

しかし、この一文は、日本語としては、不成立である。だから能動文の「彼は縄で箱を縛った。」で表すのが自然である。

(5)客語は動作の結果である。

他被大家選為小組長。

これは「彼は皆から組長に選ばれた」と直訳すればいい。中国語の「為」が「に」で表されるのも理解しやすい。中国語において、客語だった「小組長」が日本語の場合、「に」格で表すのが普通である。ただ動作主の「に」格と間違えないように注意しておく必要がある。

(6)主語は場所である。

大門被人上了鎖。

これをそのまま受け身で日本語に訳せば、「門には、錠がかけられている」になる。けれども、このような受け身表現は日本語としてあまりいい表現ではない。「門には錠がかけてあった」と訳するのが自然である。しかし、いずれにしても、中国語で主語だった「門」は日本語になると、「に」格で表される。そして、それを「は」でもって、主題として扱われる。「門には」はもう主語でなくなり、場所を表す連用修飾語の前置きという点に注意すべきである。

(7)主語は材料、道具である。

她用那塊布做了一条裤子。

那塊布被她做了一条裤子。

これを日本語に訳せば

a あの生地は彼女によってズボンに作られた。

b あの生地を彼女にズボンに作られた。

c 彼女はあの生地でズボンを作った。

a・b文は(4)の場合と同様に不成立であり、c文が一番自然な表現である。

(8)客語が方向性の動詞の客語である場合、場所を表す。

他被我推下水去。／彼は私に水中に突き落とされた。

日本語の中で、方向を表すのに、主として「へ」、「に」を用いる。だから、客語だった「水」が「に」格で表されることは、こ

の種類の文での日中国語の異なった点である。

(9) 客語が介詞の客語である場合、場所を表す。

a 我被他拉到屋里。／私は彼に部屋の中に引っ張り込まれた。

b 他被反动派置于死地。／彼は反动派に窮地に追い込まれた。

a・b文では、「屋」、「死地」はそれぞれ介詞「到」、「于」の客語だったが、これらの「到」、「于」の介詞は方向、場所を表すから、日本語に訳したら、「に」格で表すのが普通である。また、a・b文の客語が場所を表すのに対して、介詞の客語が動作主を表す例もある。例えば、

a 人民抛弃反动派。

b 反动派被弃于人民。

介詞「于」の客語「人民」は「拋棄」という動作の出所だから、日本語に訳せば、

反动派は人民に見捨てられた。

「人民」が動作主という意味において、「に」格で表すのが当然なのである。

(10) 慣用句に用いられた動詞と客語の場合

a 敌人被我们打了埋伏。／敵は私たちのおいていた伏兵に全

滅された。

b 張小三被攢了個嘴啃泥。(陳登科)／張小三は口にいっぱ

い泥を押し付けられた。

日本語にも、こういう使い方があつた。例えば、

時ならぬ沖合からの叫びに師の村の人達は、度胆をぬかれたのである。(壺井栄「二十四の躰」)

文三はお勢に心を奪われていた。(二葉不亭四迷「浮雲」)

「度胆をぬく」、「心を奪う」は慣用句であり、受け身の場合も「度胆」、「心」をそのまま客語とするのである。

以上見たように(1)から(10)までは、中国語でも客語をとる文としての意味は同じである。しかし、中国語で客語があるのに、日本語になると、「を」以外の運用修飾語となる場合がある。日本語の客語は格助詞の「を」で表される。(もちろん、「を」で表される語は必ずしも客語とは限らない)だから、その概念範囲は、中国語と比べて、ずっと狭い。これは日本語では、語句、或いは単語の文中に置かれた位置が格助詞で表されるからであろう。

それでは、次に日本語において、「を」を含んだ受け身文を検討しよう。

日本語では、能動文を受け身文に換える時、次のように能動文の「を」格をそのままにする場合がある。

(1) 間接受け身文に用いられる。

a 甲は乙に日本語を教えている。

b 乙は甲から日本語を教えられている。

a文では「乙」も「日本語」も、連用修飾語とされ、さらに細かく分けて見ると、b文では「乙」は「教えられる」の主語となっている。けれども「日本語」という成分は「教える」、「教え

られる」の変動と関係なく、始終「教える」という動作の客語である。

(2) 利害の受け身

第二節であげた例文は、客観的で、話し手と利害関係がない、それに対して、話し手または主語と利害関係にあるという意味で、ここではそれを「利害」と名付けよう。

1 被害の受け身

日本語では、他動詞に受け身態があるだけでなく、一部の自動詞も受け身態がある。「昨夜、赤ちゃんに泣かれて、よく眠れなかった」のように、話し手が「泣く」という動作の影響を受けて、迷惑するという意味の言い方がある。ただし、自動詞にだけ迷惑の受け身があるのではなく、他動詞にも受け身文において「を」と「が」の使い分けによって、被害の受け身を表すことができる。例えば、

a 家が焼かれた。 b 家を焼かれた。

この二例においては、a文は客観的な叙述で話し手の感情が含まれていないのが普通である。b文には話し手が直接に、または間接にその影響を受けて、迷惑しているという意味が含まれている。a文と比べて、主観的である。「真冬ののに、焼け出されるのは困る」という話し手の切実な感情を感じ取れる。

同じ例として、次のようなものが挙げられる。

a 台所においた魚を猫に食べられてしまった。

b 門を閉められてしまって、中に入ることができない。

c 私は足を虫に刺されて、痛くてたまらない。

以上の各例文では、「を」格に立つ名詞を主語にすえないで、そのまま客語とするのが特徴である。a文「台所においた」とb文「中には入ることができない」には主語が現れていないが、実際に「私」という潜在的な主語が全文を支配している。それを「が」で換えると被害の意味がなくなり、傍観者の立場に立つことになる。c文「私・足」では主語と客語とが所属関係にある。要するにそのいずれも間接受動者たる人間中心の受け身表現である。「が」と「を」の使い分けによって、話し手の立場、即ち、傍観者かそれとも当事者かが分かる。この問題は、中国人の学習者にとって、案外難しい。

2 恩恵の受け身

「を」で表される受け身は、被害を表すのが一般である。しかし、時としては、恩恵の気持ちを抱く場合もある。

a 仲人に手を取られて退場する。

b 妹は先生に作文をほめられて、うれしそうです。

a文には潜在主語「私」が恩恵を受ける語感が入っている「てもらおう」と置き換えることができる。b文では主語たる「妹」は「ほめる」という動作を受けている。

中国語の受け身表現では、本意を表すのが多い。本意か本意かは主として、受け身にされた動詞によって分かる。例えば、

「ほめる・許す・助ける」などのような動詞、それらの動詞自身がいい意味で用いられるから、恩恵として理解しやすい。日本語も大体そうであることはいうまでもあるまい。ところが単に動詞から見るのでは、不十分で、前後の關係を見なければ、本意か不本意かの判断が下せない場合は、中国語にも、日本語にも幾らもある。例えば、

a 娟子の傷好后、被調到区上工作、担任婦教会長。／娟子の傷が直ってから、区役所に転勤させられて、副婦教会長になった。

b 此后、我被調到另外一个地方、而且改了行。／その後、私はほかの所に左遷させられた。

a・b二例では、皆「調到」／「転勤する」という動詞を用いたが、前例では、本意、後例では不本意を表すことが明らかである。日本語もそうである。例えば、

a 仲人に手を取られて退場する。

b 私家打捨つといひ、ひよいと外の人に取られちゃつまらないと思つてさ……（永井荷風「腕くらべ」）

同じ「取る」にしても、a文では「でもらう」の意味で、本意を表し、b文では「盗む」の意味で不本意を表している。

3 慣用句に用いられる。

目的語を含む慣用句は、受け身に換えても、「を」格をそのままにする。これは受け身文に客語を含む用法の一つである。それ

について、先に述べたので、ここで贅言しない。しかし、ここで言いたいことは、客語を含む慣用句は、受動形に換える際、必ずしも、「を」格そのままにするとはいえないことである。例えば、美しいものには、だれしも心が引かれるものです。「を」の代わりに、「が」の用いられる用例である。「を」に比べて、客観的である。

四 迷惑の受け身

中国語の受け身文においては、述語をつけることができる。そして、意味の上では、「被」の前の名詞を支配できる動詞でなければならぬ（「現代漢語八百詞」）。即ち、その述語動詞は他動詞でなければならぬという意味である。ところが、日本語の場合、他動詞はもちろん、一部の自動詞でも受け身表現が成立できる。例えば、

a タベは友達に遊びに來られて、勉強がでなかつた。

b この子は父に死なれて、学校へも行けなくなりました。

以上の例文は、「他者の動作、作用の結果がある影響を自分のほうに与える言い方である。自分の力では防ぎようのない、相手側の一方的行為、作用に対して用いられ、間接的にその影響を受ける人間が主語として立つ。……迷惑意識が強く、心理的受け身として、情意的な陰影の濃い、はなはだ日本的な受け身である。」（森田良行「受け身、使役の言い方」。「私は父に叱られる」の

たぐいの受け身では、父は「叱る」という動作を發して、「私」は直接にその動作を受ける。それに対して、例えば、「友達に來られて、勉強がでしなかつた」のような受け身文は「友達が來る」によつて、こちらが、その影響を受けて、迷惑している。この意味では、迷惑の受け身は間接の受け身と言つてもよい。中国語の受け身文では、客観的な叙述においても、本意、不本意の意味においても、その動詞は主語を支配できる動詞で、他動詞であるのが一般である。ところが、中国語には自動詞の受け身が全くないとは言えない。例えば、

官軍追殺一陣、因為地形復雜、給郝搖旗逃脫了。／將兵は一氣に追撃したが、地形が複雑なので、郝搖旗に逃亡された。

一定是叫跑了、一個、們事先埋伏的隊員、不是每個人都分好了？
／きっと一人に逃げられたに違ひない、あなたは事前ほどの隊員も決められた所に潜伏させておいたのではないか。

この二例は迷惑の意味を表すのは明らかである。その自動詞は「逃」、「跑」などに限られている。もちろん日本語でも、受け身にすることのできる自動詞には制限がある。

「父に死なれる、泣かれる、行かれる、客に來られる、家に上がり込まれる、席に座られる、従業員に休まれる、泣き付かれる、雨に降られる、雨にたられる」(森田良行「受け身、使役の言い方」)などの、中国語では受け身になれない自動詞も受動にすることができ、それがために、われわれ中国人の學習者が使う時

にも、訳す時にも間違ひを引き起こすこともしばしば見られる。むやみやたらにどの自動詞にも「れる・られる」をつけるということをしたりする。どのような自動詞が受動形として使えるかについて、森田良行氏「受け身、使役の言い方」の中で、すでにはっきり述べているので、ここでは贅言しない。そして、そのような自動詞の受け身を中国語に訳す際にも、簡単に「被」と訳さないで、文の意を正確に把握して、中国語の習慣に従うことが大切である。

五 日中それぞれの表し方

日本語の受動表現では、五段動詞には「れる」がつき、それ以外には「られる」がつく(サ変動詞の場合は「ざーれる、圧せられる、乗せ(じ)られるなど、語によつて異なる)のが特徴である。そして、動作主を表すのに、「に」、「から」、「によって」などの格助詞が用いられる。この点では中国語に比べて、複雑である。中国語では、受動表現のマークとして、「被・給・叫・(教)・讓・由」などの「介詞」が用いられる。これらの「介詞」は単独で述語になることができず、必ず名詞、または動詞の前にすえて、「介詞の連語」を構成して、次の動詞を修飾する。「被・給・叫・讓・(教)・由」などの「介詞」は、名詞の前にすえて、動作主を表す。その中で「被・由」は文章に多く用いられる。「給・叫・讓・(教)」は使役と混用しやすいので、文章に

はあまり用いられず、口語にだけ用いられる。日本語の場合、「に」はあらゆる受け身文に使うことができるが、「に・から」によって「は、全く同じ意味ではなく、混用しては、間違いを起こすこともある。「に」は受け身文に一番多く用いられる格助詞である。受け身では動作主を表すのに、「に」はどんな場合にも適用する。「から」はある場合は使えない。例えば、「子供に(Xから、Xによって)泣かれる」、「客に(Xから、Xによって)来られる」のような自動詞の迷惑の受け身の意味においても、「に」でなければならぬ。これは単に被害の受け身から考えるのでは不十分である。「皆から悪口を言われた」も被害の受け身であるが「から」を使うことができる。だから、述語動詞の性質から見ればきだと思う。「から」は、動作・作用の出發という意味が含まれているから、音声・言葉が発するという動作に使用できるようである。

場合によると、「に」と「から」とを置き換えることができる。これは大体次のような場合である。

(1)「から」をとることのできるものは、人間を表す名詞、代名詞、それに「学校・警察・会社」などのような擬人化できるようなものに限られる。(鈴木忍「文法」より)

(2)動作主は人格名詞だからと言って、みな「から」をつけていいと思われがちだが、「私はすりから財布をすられた」のような文では、「から」を使って、いけないことはないが、不自然

さが感じられる。だから「から」を使って、いいか悪いかはまた述語動詞と関係があると思う。「から」は前述したように「ほめる・頼む・言う」のような音声による動作が直接に相手に及ぶ動詞の来る文に使える。

(3)「から」の使用は「田中先生は学生から尊敬されている」のように、動作主が集団、普遍性を表す名詞にもつく。

(4)「彼は皆から代表に選ばれた」のように、一つの文の中に、「に」が現れては混乱が起きやすい。それを避けるために「から」を用いるほうがすっきりする場合があると思う。

「AはBに(から)いされる」が日本語の代表的な受動形であるのに対して、「AはBによっていされる」というのが西欧語式の受動表現の一般形式とされている。「成功は不断の努力によって、達成される」のように、西歐的受動形は無生物や抽象名詞が主語に立つ表現が一般的である。

六 受動形になれない動詞

中国語では「逃・跑」のような自動詞を除いて、自動詞のほとんどが受動形にならない。日本語の中でも、一部の自動詞(前に挙げた)を除けば、ほかの自動詞には受動形がない。中国語の「埃・受・蒙受」、日本語の「受ける」は、それ自身すでに受け身の意味が含まれるから、受動形がない。

日本語では、「読める・書ける」のような可能動詞と「でき

る・見える・聞こえる」のような可能の意味の入る動詞は受動形がない。そして、「授かる・おそわる・助かる・仰せつかる・言
い付ける・ゆだる・かぶさる・預かる・もてる・うてる・つかま
る」など、すでに受け身の意味を持つ動詞も、「れる・られる」
をつけて、受け身にすることは出来ない。

受け身というのは、人や事物に動作・作用が向けられ、その影
響や結果が及ぶ意味を添えるもので、受け身形は「AがBに(c)を
動詞+れる・られる」という形で起き、「AがBに(c)を動詞」に
より直接または間接の影響を受けることを表す。間接影響の場合
は、Aが何らかの意味で被害であるという感じが出る。一般的
に言って、受け身形の主語には、非生物名詞は起こりにくい。間
接受け身の場合は、ことにそうである。

(岡山大学大学院文学研究科修了)